事業名

コロナ禍における沿線活性化モデル

「ご近所観光」共創事業

日　時　2020年9月19日、11月8日、12月5日、12月12日、12月13日、12月20日、2021年1月10日

会　場　実施内容に記載

参加人数　延べ359人（内訳は実施内容参照）

主　催　南海電気鉄道株式会社和歌山支社・和歌山大学紀伊半島価値共創基幹

概　要

新型コロナウイルスの影響により和歌山エリアへの来訪者数は激減した。和歌山大学と南海電鉄は、コロナ禍における沿線活性化モデルとしてマイクロツーリズムに着目、感染症対策（検温実施・マスク着用・三密回避）を徹底し、また長時間にならず現地集合・現地解散を基本とした「ご近所観光」ツアーを企画、地域住民を主な参加対象とし実施した。和歌山大学観光学部の小野健吉教授（庭園学）の案内によるツアーや和歌山大学経済学部の学生が企画したツアーをはじめ郷土史家・建築家の先生方また和歌山電鐵、ホテル萬波等の地元企業のご協力をいただいて実施した。

実施内容

①紀州徳川家 庭園の美と技を語る

2020年9月19日（土）　案内人 小野 健吉（和歌山大学観光学部教授）

「午前の部」　和歌山城西之丸庭園（紅葉渓庭園）

【集合】西之丸庭園北側入口（参加41人）

高低差のある地形を利用した空間構成、紀州青石（結晶片岩）を用いた各所の石組、「紅松庵」付近から「上の池」を見る景観など多くの見どころがある西之丸庭園を案内人の解説により見学した。

「午後の部」　養翠園

【集合】養翠園入口（参加44人）

養翠園は、文政年間、第10代紀州藩主徳川治宝が営んだ別邸である。大浦湾に面した立地を活かして池に海水を取り入れた潮入りの庭として貴重な庭園である。

和歌山城西之丸庭園

②明光通り 明治・大正の建築群＆真砂町 戦禍を逃れた名建築を巡る

2020年11月8日（日）　案内人 中西 重裕氏（建築家）

「午前の部」　朝間家・梅本家・松木書店・多田家

【集合】和歌浦口バス停（参加36人）

「午後の部」　滋野医院・御前家・浜病院・真砂浄水場

【集合】真砂町バス停（参加38人）

③飛行船のパイオニア・山田猪三郎と和歌の浦

＜企画 角田 廉於（和歌山大学経済学部3回生）＞

2020年12月5日（土）　案内人 小林 護氏（山田猪三郎顕彰会 代表世話人）

山田猪三郎顕彰碑（高津子山）・ホテル萬波 会議室

【集合】新和歌遊園バス停（参加22人）

山田猪三郎は1863年和歌山市新堀七軒町（現、堀止西）に生まれる。1910年9月8日「山田式飛行船」第1号飛行成功。1911年9月17日、同3号が東京都心を一周、都民を大いに驚かし、9月20日が「空の日」に制定されたと言われている。

④紀州の名治水家・井沢弥惣兵衛の足跡を巡る

＜企画 久保 輝希（和歌山大学経済学部3回生）＞

2020年12月12日（土）　案内人 古畑 武男氏（井沢弥惣兵衛さんを知ろう会会長）

井沢弥惣兵衛生家跡・野上八幡宮・亀池

【集合】海南駅前バス停（参加17人）

井沢弥惣兵衛は、1663年紀伊国溝ノ口村（現、海南市野上新）で生まれる。紀州藩士として藩内各地の治水や灌漑用水の工事に携わる。将軍となった徳川吉宗の命により江戸へ。関東平野の新田開発を行い、吉宗が米将軍と言われる基礎を築いた。

井沢弥惣兵衛之碑

⑤堀止 江戸～明治・大正・昭和の建築＆伊太祁曽 山東～吉礼のまちなみを巡る

2020年12月13日（日）　案内人 中西 重裕氏（建築家）

「午前の部」　三尾家・六三園・郭家・歩兵六連隊跡・万性寺

【集合】堀止バス停（参加56人）

「午後の部」　伊太祁曽駅検査場・伊太祁曽神社・吉礼まちなみ・都麻津姫神社

【集合】伊太祁曽駅（参加33人）

伊太祁曽駅検査場は、和歌山電鉄伊太祁曽駅構内の東側に西面して建つ。

桁行52メートル、梁間7.6メートル、切妻造の木造平屋建で、南面に片流れの附属屋を付ける。小屋組は丸太を用いたキングポストトラスで、床にはピットを2本設ける。木造の車両検査場として貴重な遺構である。

伊太祁曽駅検査場

⑥城下町の風景を訪ねて「紀伊国名所図絵」

案内人 額田 雅裕氏（元和歌山市立博物館館長）

「第1弾」　2020年12月20日（日）

大手門・一ノ橋～本町界隈

【集合】公園前バス停（参加35人）

「第2弾」　2021年 1月10日（日）

追廻門～寺町界隈・岡の宮

【集合】県庁前バス停（参加37人）

右図は1855年和歌山城下町絵図（案内人資料）であるが、城下町では同業種の職人・商人が集まっており、そのことに由来する町名が現在も多く残っている。

和歌山城下町絵図

考　察

「ご近所観光」は、企画者・参加者・案内人の距離感もたいへん近く、双方向のコミュニケーションを重視した形で構成されている。地域資源の価値への共感がベースとなる。

ポストコロナ社会を見据えれば、再び大阪都市圏などに向けてPRできる地域資源をテーマとした着地型観光モデルをできるだけ多くストックしておく意義はある。多様な地域資源が新発見・再発見され共感が拡がることを期待したい。

事業に関するお問い合わせ
価値共創オフィス
E-mail : region@ml.wakayama-u.ac.jp
URL : http://www.wakayama-u.ac.jp/kii-plus/projects/microtourism